

兄弟を得る交わり

[マタイによる福音書 18 章 18～20 節]

「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の証人の口によって確定されるようになるためである。それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なしなさい。はっきり言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつなぐとすれば、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」

[1] 厳しい言葉

今日の聖書の箇所、20 節はとても有名です。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」しかし、そのことが語られる前の前半の所では、イエス様の言葉としては珍しく、信徒同士のつまずきや過ちが取り上げられ、そしてそこには厳しい言葉がありますね。主に在る兄弟姉妹の交わりで問題が誰かが具体的な罪を犯した時、まずは当該者の間で話し合いなさい、それで解決しない時は、解決のため、他の人も交えて話し合いなさい、それでも難しいようであれば、「教会」の中でそれを分ち、解決に導かれるように努めなさい、と言っています。どうして「教会」に持ってくるの？と思われるかもしれませんが、それは、事柄を公にすることよりも、本当に祈りの中で解決を求めていくということだと思います。人間の弱さや罪がもたらすことの解決は、根本的には、上から、神様から、イエス・キリストから与えられるからです。そうでないと、本当の癒しも与えられない。また同じことが表面に出てきてしまうことがあると思います。

[2] 異邦人か徴税人と同様に見なしなさい？

私は教会の牧師として働くように導かれてから、早いもので、この4月で4年目を迎えたこととなります。本当に未熟な牧師で皆様には申し訳ないと思いますが、何とか皆様のお祈りと愛に支えられて今日までやって来たと思っています。

す。私は今、二つのことを思っています。それは、今後も牧師を続けられるかどうか、それは自分の「能力」では無理だということがハッキリとしてきたということが一つです。本当に神様の憐みと聖霊の御力によらなければ一步も進めないということがわかってきたように思います。もう一つは、そもそも「教会とは何か」ということ、皆さんと一緒に見つめ直してゆきたいという気持ちになっています。「これ迄こうだったのだからこうなければならない」ではなくて、「そもそも「教会とは何なのか」ということです。勿論お互い仲が悪ければ、教会が真に重荷を降ろす場所になりませんから、それでは教会は無い方が良くと思います。しかし「仲が良い」ということが教会の一番大事なことではないと思います。

その意味では、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」とイエス様がおっしゃった教会というのは、その教会を形作っている人々の間で問題は確かにある、罪もある、けれども、それがパン種のように膨らむのに任せておくままにはさせない所として教会を捉えているように思います。その悪影響は止めなければならない。イエス様は先週も申しましたように、非現実的な理想主義者ではないのです。現実をうやむやにはなさいません。—「教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なさい。」と語っておられます。「え、イエス様は誰にも優しいお方じゃないの？」と思います。確かにここでのイエス様、厳しいです。けれどもこれは“追放”ではありません。むしろ本当の意味で「兄弟を得るため」なのです。上辺の兄弟姉妹の関係ではなくて、その兄弟が立ち帰ることを何よりも喜ぶ所が教会です。「異邦人か取税人と同様に見なす」とイエス様はおっしゃいました。けれども、よく聖書を見てみましょう。皆さんもよくご存じのように、そのような異邦人や取税人を愛し、誰よりも強く探し求め、自ら交わったお方がイエス様です。教会はこの主イエス様の「赦し」のもと、十字架のもとに共に立つ群れです。教会の中心は、誰か特定の教会員ではありません。もちろん牧師でも執事でもなく、「罪の赦し」をもたらす主イエス様だけが中心です。今日の箇所直前でイエス様がおっしゃった言葉はとても大事で、今日の箇所との関連で聴くべき言葉だと思います。18章14節です。—「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」

[3] 教会の土台には神の「名」がある

私たちが「教会」ということを考える時、「教会」をお建てになったのは、神様ご自身だということ、をいつも覚えていたいと思います。新生讚美歌に載っている「教会の約束」にもこうあります。—「教会は人によって成ったのではなく、神によって成ったものと信じます」。私たち一人ひとは、神様の憐みによって

召し集められたお互いであるのですね。今日、ご一緒に読んだ交読の聖書の箇所も（それは「献堂」という題でした）ああ、本当にそうだなあと思いました。

「神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。わたしが建てた神殿など、なおふさわしくありません。わが神、主よ、ただ僕の祈りと願いを顧みて、今日僕が御前にささげる叫びと祈りを聞き届けて下さい。そして夜も昼もこの神殿に、この所に御目を注いでください。ここはあなたが「わたしの名をとどめる」と仰せになった所です」（列王記 8 章より）。これはソロモン王の祈りの言葉です。とても謙虚です。「ここはあなたが「わたしの名をとどめる」と仰せになった所です」と語ったように、神殿の土台とは神様の名前なのです。そして今、新約の時代の御堂＝教会の土台は、「見よ、わたしは世の終りまでいつもあなたがたと共にいる」（マタイ 28:20）と約束された主イエス様のお名前なのです。私たちの交わりとは、この主イエスの名のもとにある交わりです。それは、人間を超えた、**主の憐みと赦し**にお互いが立ち帰ってゆく交わりです。

[4] 「愛しているよ！」

ひと昔前のアメリカのテレビドラマで「大草原の小さな家」という長いシリーズドラマがあったのを覚えておられる方も多いと思います。最近ではネット動画でも見られるようになりました。まだ西部開拓時代の話ですけれども、とても信仰的な物語が随所に表現されていたドラマでした。その中で私がとてもよく覚えている話があります。

チャールズ・インガルス一家には三人の娘さんがいて、一番上の娘はメアリーと言って、目が不自由なのですが、もう結婚をして男の子が生まれたばかりです。ところが、その子が盲学校の屋外パーティが開かれていた時、叔母さんにあたる親戚のアリスと共に中に学校の中にいたのですが、突然の火事に遭って二人とも死んでしまうのです。メアリーの嘆きは深いものでした。後で原因が分かります。それはインガルス家に養子になったアルバートという中学生位の男の子が、他の男の子にそそのかされて盲学校の地下でパイプを吸っていたその吸い殻が原因であったらしいと。それが分かり、アルバートは罪の意識に苛まれ、家出をしてしまいます。インガルスさんと、自分の妻アリスを失ったジョナサンは馬車に乗って彼を捜しに行きます。アルバートが逃げ場として行った所は、遠くに住んでいることが分かった実の父親の所でした。しかし、その場所に何とか行ってみると、もう父は死んでいたということがわかりました。もうどこにも行き場所がないアルバートです。そこにインガルスさんとジョナサンは到着するのですが、アルバートは走って逃げだします。やっとのことでジョナサンが彼を捕えます。

「僕のせいだ。僕のせいだ。放っておいてくれ」と泣きじゃくるアルバート。その彼にジョナサンはこういいます。「お前は自分を責め、私は神様を恨んだよ。で

も、そのどちらも違うことがわかったよ。自分を責めても神様を恨んでも何も始まらない。前に進んで行こう。死んだ人が誇れるように」と言います。涙を流すアルバート。彼をしっかり抱くジョナサン。インガルスさんはその様子を少し離れた丘の上から見つめています。（彼はその時足を悪くしているという設定です）。それに気付くアルバート。インガルスの言葉はたった一言だけです。初めは小声で。そして大きな声で。「愛しているよ！（アイラブユー！）」丘の上で腕を広げるインガルス。そこに飛び込んでいくアルバートの姿。これが、ほぼラストシーンです。

私たちも本当にそのようにしてイエス様に迎えて頂き、言ってみれば神様の養子にされたお互いではないかと思えます。失敗も犯しますし、誰かを傷つけてしまうこともある。罪人の集まりです。それでも、教会は神様が建てて下さった場所です。その中心にあるのは、人間の言葉を越えたイエス様の赦しです。私たちお互いが結びつくことができるために、主は十字架の上で血を流されたのではないのでしょうか。

東日本大震災のラジオの特別番組で、作家の重松清さんがこの震災のことに関わるようになった時のことをお話されていました。それは、宮城県であの津波の後の写真の修復をしている人たちとの出会いだったというのですね。ボロボロになっているけれども、どの写真もみな笑顔で、優しい顔をしている。それぞれの物語がある。それで思い出した歌があるというのですね。荒井由実さんの『卒業写真』です。こういう歌詞ですね。

「悲しいことがあると 開く皮の表紙 卒業写真のあの人は やさしい目をしてる
(中略)人ごみに流されて 変わってゆく私を あなたはときどき 遠くで叱って」。

重松さんは、写真のその人が、今も時々「ばかだなあ、お前」と優しく叱ってくれる。それが一緒に生きていくということなのかも知れない、私たちを成長させてくれるものなのだろうと語られていて、とても感動しました。

教会は、「共に生きる群れ」です。それは排除や競争の論理ではなく、「兄弟を得る交わり」、驚くべき恵みが支配する共同体、「世にはなき交わり」です。

さあ、新年度、ご一緒に、イエス様の愛を新しく受けて歩んで行きましょう。今年の聖句を読んでお祈り致します。詩編 119:114 です。

—「あなたはわたしの隠れが、わたしの盾、御言葉をわたしは待ち望みます」

お祈り致します。